

〈修士論文要旨〉

近江湖西地域における山岳寺院の変遷

—絵図と寺院遺構の分析から—

小林 裕 季*

本稿では学際的研究の立場から近江湖西地域における山岳寺院の変遷について迫った。湖西地域では山岳寺院に直接つながるような史料は非常に乏しく、限られた資料を手掛かりとして考察していくことを余儀なくされる状況にある。そこで湖西地域の旧滋賀郡志賀町域に所在した比良荘を中心に描かれた『近江国比良荘絵図』と、山岳寺院の個別事例として旧高島郡今津町に所在する酒波寺の境内を描いた『青蓮山絵図院内』を分析し、さらに現地遺構の地表面観察の結果から山岳寺院の動向を検討した。

これまでの山岳寺院研究の動向としては、古くからその存在は認識されていたが、実態は想像以上に複雑であり研究が滞っていたことは否めない。しかし近年、地道な研究の積み重ねと資料の蓄積によって多方面からのアプローチが試みられ、各地でシンポジウムも行われるなど山岳寺院に対する注目度も増した。中世寺院研究の進展とともに山岳寺院についても様々な側面が明らかにされつつあることも事実である。今後の研究展開によっては山岳寺院のみならず、地域社会における歴史復元や従来の歴史認識にも影響を与える可能性が高い。

これまで山岳寺院については個別の大寺院の研究は積極的に進められてきたが、地域における山岳寺院の実態に言及した研究は数少ない。本稿で検討対象に設定した近江湖西地域は、古代より七高山として信仰対象にあった比良山系が連なり、ダンダ坊遺跡や長法寺遺跡といった石垣などを備え相当な規模を誇った山岳寺院が点的に数多く存在する。しかし湖西地域の寺院の実態は現在も不明瞭で、研究が進んでいないと言わざるを得ないのが現状であった。近江湖西地域での山岳寺院の実態が不明瞭な要因のひとつとして、相当な規模の遺構をもつ寺院であっても、文献史料にはその多くが寺坊の売券などにわずかに名前が確認される程度で、遺構と文献史料とのつり合いがとれていないことが挙げられる。逆に文献史料には大寺院とされていても所在地や遺構が不明な事例もある。発掘や測量などの調査事例もわずかで、寺院の実態につながる手掛かりとなる資料が根本的に少ない地域といえる。

特に様々な側面をもつ中世山岳寺院は、その実態や地域的な視点から研究を進めていくためには、多方面からのアプローチが必要不可欠であることが既に提起されている。当然、実際の研究には考古学的手法や縄張図のような空間構造分析といった、ある立脚点からの検討に依拠し、各研究方法に適合した分析を十分に行った上での話であるが、補完的に研究を進めることで実態に近づいていくことができるとする立場にたつ。

今回検討した寺院を列挙すると、高島七ヶ寺と称された長法寺・松蓋寺・太山寺・清水寺と、文献により七ヶ寺に含まれる大谷寺と酒波寺、そして清水寺に隣接する大宝寺。旧志賀町域では湖西地域最大級の規模を誇るダンダ坊、『比良荘絵図』にも描かれる法花寺・歡喜寺、比良山系最古級の山岳寺院である最勝寺もしくは妙法寺の故地に比定される大教寺、そして天台修験の道場として現在まで存続する葛川明王院である。

『近江国比良荘絵図』は、現存するものは室町後期に写されたものであるが、裏書に弘安3年(1280)と永和2年(1376)の二つの年号が筆写される争論絵図である。長法寺・法花寺・歡喜寺・明王院などは記載されるがダンダ坊については記載されない。争論には比叡山東塔の勢力が関わり、絵図に描かれた長法寺や明王院、歡喜寺は東塔の関与があり、一方のダンダ坊は横川の勢力下にあったとの伝承が残り、争論に関わらないため描かれなかったと考えた。さらに分布をみると、これらの寺院は荘境や郡境に立地しているため、比叡山三塔と関わりを持ち、荘園支配に携わることで寺院を肥大化させていったことが明らかとなった。

『青蓮山絵図院内』からは個別事例として酒波寺の寺坊の構成を分析した。その結果、照光観音堂のようなリーダー格となる寺坊も現れるが、それぞれの寺坊が独立性を保持し、様々な本尊を持つ複数の寺坊の集合体として酒波寺が存在していたと考えた。

地表面観察の結果から酒波寺以外の山岳寺院の動向についても検討した。古代の山岳寺院の立地には、やはり滝や磐座や湧水といった修行にふさわしい場を選んでいたことがわかり、葛川明王院やダンダ坊などのように古代から中世へと存続したと考えられる寺院も存在した。中世の山岳寺院の構造は、寺坊の分化が進んでいない事例や逆に本堂などに優位性がみられる事例もあるが、一部の寺坊が突出することはなく、それぞれの寺坊が独立性を保持し、強い求心性は発揮できなかったと推測される。長法寺などは本堂の優位性を志向し、求心性の高い傾向にあるが、強い求心性を発揮して他を圧倒する前に、新たな時代の変革の中で衰退がはじまる。

湖西地域の山岳寺院の大半は本堂などの求心性が萌芽する傾向にありながらも、従来の荘園体制の変化や真宗寺院の台頭などの要因で15世紀後半頃から衰退していく。そして衰退した山岳寺院は城郭化していく傾向がみられるが、高島では寺社勢力に替わるように高島七頭といった武家勢力が築城・改修に関わり、一方の志賀では六角氏に属しながらも僧名を名乗る木戸十乗坊など、寺社勢力が在地勢力として城郭化を進める。こうした築城・城郭化の動きは16世紀半ば頃から織田信長が近江に侵攻する元亀年間に活発になり、その結果、延暦寺をはじめとする寺社勢力は壊滅的な打撃を受け、湖西地域の中世山岳寺院も決定的な終焉を迎える。

湖西地域の山岳寺院について上記のような変遷を追うことができた。古代・中世の寺院は地域において大きなウエイトを占めていたが、まだまだ不明な点が多い。特に地域に残る中世山岳寺院については様々な要素が加わり複雑な様相を示すため、今後さらなる研究の進展が期待される。湖西地域では寺院遺構の資料化が早急の課題である。図化された遺跡にも遺構の漏れや、城郭遺構に比べて遺構の判断が困難といった問題もあり、詳細な検討に耐えうる資料が非常に少ない。山間部に立地し、範囲も広い実務的な問題もあるが、地道な活動の積み重ねによって今後も大きく研究が進展していくものと思われる。